

黒川文庫蔵『仙源抄』影印

渡 邊 道 子

○ 書誌事項

写本一冊。麴塵色の糸による四ツ目綴じ。寸法は縦二六・五糎×横一九・二糎。

表紙は香色桐文様型押し紙表紙。左肩部に「仙源抄」と打ち付けで墨書。

内題ナシ。本文料紙は楮紙。墨付全三七丁。片面七行。

印記は「物語」「黒川真頼藏書」「黒川真道藏書」「実践女子大学図書館印」を捺す。

○ 跋文・奥書及び本文など

黒川文庫本『仙源抄』は、その末尾に著名な長慶院の跋文

安か弘和四年号なし
弘和のはしめの年三のあまりのおり／＼なかき夜のつれ／＼もなくさめかたく侍しまゝに光源氏物語をとりて

みるにおほつかなき事とおほかりしかはふるき尺ともを尋み侍るにいつも肝要ハすくなく枝葉ハおほし又
 同尺とも所々に有てひらきみるに煩ひ有これによりて水原抄五十餘卷紫明抄十二卷原中最秘抄二卷の中古人の
 解尺よりはしめて句をきり聲をさすにいたるまで一ふしあることを残さす又定家卿か自筆の本に比較して相違
 の事を勘つゝ同文字なる詞をいろはの次第にあつめとゝのへてみれば六十餘卷たゝ一帖につゝまり文字のつ
 てを尋れハたな心をさすかとし殊なるふしもそハねハあなかに秘すへきにあらされ共いさをひらきて全
 をひろへハその数をつくす事かたしといふたとへを思へハたやすく人にみせんこと。かの抄物の作者の本意に
 そむくかたも侍へきにやそのうへ愚なる心にいかゝとおほゆる事をさへ書付侍ぬるはゝかりおほきやうなれと
 もとより此物語にはしめてとりむかはんものゝ先賢の注尺などをも見て事かなへざらんひとのためにとおもひ
 てかくのことくめやすにしろし侍れハこれにつきて一のれうけんのたよりにも成なんかしとてとゝめす成ぬる
 也かの抄にのせさることハたまゝ思ひえたる事も注し付るにあたハす抑文字つかひの事この物語を沙汰せん
 に付てハ。つ。いてに申侍へし中比は定家卿かされためるとかいひてかの家の説を受るともからしたかひ用る様
 (心うへき事なれハ也)(朱)
 (朱)ありおほよそ漢字にハ四聲をわかつて同し文字も音に随ひて心もかはれは子細に及はす和字ハ文字一に心なし
 文字あつまりて心をあらハすもの也されハふるくより聲のさたなし或ハ別の聲を同音に用たるありをハ遠上声又越ハ
 越也。入声いハ以上声伊ハ伊平或ハ訓音に假たるありとハ止江ハ江也又丹ハ丹ニ也此類是に限らず万葉をみて広く心うへし
 先いろは四十七字の内同音あるハいぬをおえぬ也此外にはひふへほをわあうにをとよむ詞の字の訓につきてつ
 かふ文字也しハらくいろはを常によむやうにて「聲をさくらハお文字ハ去声成へし定家かお文字つかふへきこ
 とをかくに山のおくとかけり誠に去声とおほゆるをおく山と打返していへハ去声にハよまれす上声に轉る也又
 おしむおもひおほかたおき。おとろくなどかけり是は皆去声にあらず比内おしむハおしからぬといふ折ハ去声
 (朱)

及びこの跋文に一行おいて

になるおもひもおもひ／＼といふおりは始のお文字は去声後のおハ去声にハよまれぬ也。（又え文字も也）去声なるへきにふえたええたとかけりすへていつれの文字にも平上去の三声ハよまるへき也。喩ハか文字トミ文字とをあへせよむにかみ神也。かみ上也。かみ紙也。又一文字。同字をよむに上下にひかれて聲かはる事あり。天然（悉曇）震旦（朱）の法にれんしやうと云あり。又内典の経なとよむにも聲明の音便によりて聲をよミかふる事のあるも皆此たくひ成へしかミかミ神々といふに初のか文字ハ去声によまる又一字にとりても序破急と云おりハ。平声によまれ破をひく破を吹なといふおりは去声に成たくひのことし是にてしりぬ和字に文字つかひのかねて定めをきかたきことを定家書たる物にも緒の音を尾の音おなとさためたれハ音につきて沙汰すへきかと聞えたり然ともその定なる所四聲（たイ）にかなはず又一字に義なけれハその文字其訓にかなふへしといひかたし音にもあらす義にもあらすいつれの篇に付て定めたるにかおほつかなし然とも俄に此つゝるへをあらたむへきにあらす又ひとへに是を信せは音義かなふへからざるによりて此一帖にハ文字つかひをさたせすかつハ先達の所為をさみするにいたりといへとも音に返せんものハをのつから此心をわきまへしるへしと也

イ本ニ
山水のそのみなとをきよめてそちのなれも満らざりける（朱）

應永第三のきさらきの末つかた柴の庵のしハしのつれ／＼もやなくさむとてふる文ひらきみるつゝてに先人の遺毫此御草本ありかたのことく清書の心さしをのふさためて筆のあやまりも心得のひか事ものかるまじう侍らんなれとさのミためらんことハかやうにえらひをかれたらんことをしらすなりぬるハ後の人のあさけり草もかこつ方なかるへけれとも一たひは此一帖の撰せられたるさまのたへなるとを思ひ一たひハかの物語の

おほつかなきをはれんかために打をかすなりぬるハまめやかに空もをそろしう侍れとも此まゝひたふるにシ
ミの巢になさん事ハ念なくてそ

とする応永三年の仮名奥書、さらに同丁裏面に移って

元禄第五歳次壬申渡瀬氏の本をもて公務のいとまより／＼写也二月のはしめより四月の末にいたりてやうやく
功をゝへ侍る落字書あやまarioおほかるへし

松局六窓主人

という元禄五年の書写奥書を載せている。

また黒川本は、「ひたふる」の項に「行悟云永頼絶日本紀」という注を有しており、これら奥書の種類や、「行悟云——」の注に関しては「他の本を以て、校正したる點少き本に、『行悟云』の記入もあり、假名文の奥書のみなるを以て考察すれば、この本は、行悟僧正の清書せられたるものといふべきに似たり。」という和田英松氏の指摘があることより考^(注)えて、行悟僧正清書本の流れに属するものかと思われる。

それは、内容面において、「ひたふる」の項以外にも、

- ① 「けしうはあらず」の項目の末の「又下手しくあらず」
- ② 「あさけの御姿」の項目の末の「且開容儀萬」
- ③ 「しとゝに成て」の項目の末の「伊勢物語云　みのもかさもとりあへずしとゝにぬれて」
- ④ 「らうけ俄におこりて」の項目の中「予曰　靈氣ならば勞氣也」
- ⑤ 「をきなか川」の項目の中「鳩鳥の沖中川はたえぬとも　君に語らんことつきめやは」

⑥「北山」の項目の中「向南山トモ書之萬」

⑦「門ひろけさせ給て」の項目の中「愚案 此事不叶歟たゞ一門のさかえん事をいへるか」

⑧「みやひか」の項目の中「媚也 美麗也 閑雅也 毛詩には 都をみやひかとよめり」

の部分がそれぞれ存在しないこと、

⑨「うむし給」の項目末尾が「愚案下ノ説相叶歟」

⑩「かいねり」の項目末尾が「かいねりハおもてはりたるもの也」

⑪「まろ」の項目が「丸也」

となっていること、等より裏付けられようし、さらにこれらは、黒川本が和田氏の分類された行悟僧正清書本の中でも、一条実孝氏蔵本に最も近い形態を有していることを示している。

猶、永禄五年の奥書にみられる、書写者・松扁六窓主人並びに底本の所有者・渡瀬氏に関してであるが、松扁六窓主人に比定できそうな人物としては、松井幸隆が存在する。松井幸隆は没年は未詳、生年は上野洋三氏によれば、寛永二十年であるという。^(注2)江戸時代中期の国学者。京都で町与力を勤め、一名を幸高、通称を善右衛門または帯刀とも。但し、その号は六窓軒であり、それ以外に「源幸隆」「幸隆雅翁」等と記されたものはあるものの、「松扁六窓主人」と記したものは見当たらない。しかし、やり上野洋三氏の御指摘によれば、寛保三年刊の『竹雨斎詩集』^(注3)には、「和六窓主人山房夏日韻」や「冬日過松六窓居」という記載が見られるようであるから、この元禄五年の時点で、己を「松扁六窓主人」と名告った可能性も無しとはしない。一方、渡瀬氏であるが、当時の人物として浮上してくる中にこれぞという人物は存在しない。もし松扁六窓主人＝松井幸隆とするならば、元禄五年、幸隆は小出淡路守の配下として仕えているので、或いは渡瀬氏もその周辺の人物なのであろうか。乃至はそれ以外に幸隆と何らかの交わりがあった人物なのであろうか。

しかしながら、この松扇六窓主人を松井幸隆としてしまうことに些かのためらいがないわけではない。それは、松井幸隆がこの時期既に中院家の門人であった可能性が高いことによる。この時期『仙源抄』は中院家でも所蔵されていたはずであり、もし己の学問の爲の書写であるのなら、中院家系（耕雲本系）の伝本を書写したのではないか。仮にその校本を作制する目的で行悟僧正清書本の流れを組む一本を渡瀬氏なる人物から借り受けて書写したとしても、何故「松扇六窓主人」という号を用いる必要があったのか。又実際、後述するように、この黒川文庫本『仙源抄』の校合本として使用されたのは、同じ耕雲本系の『仙源抄』でも中院家へ転出する以前の『仙源抄』であつたらしい。ではそれは何故なのか。残された疑問点も決して少なくはないのである。

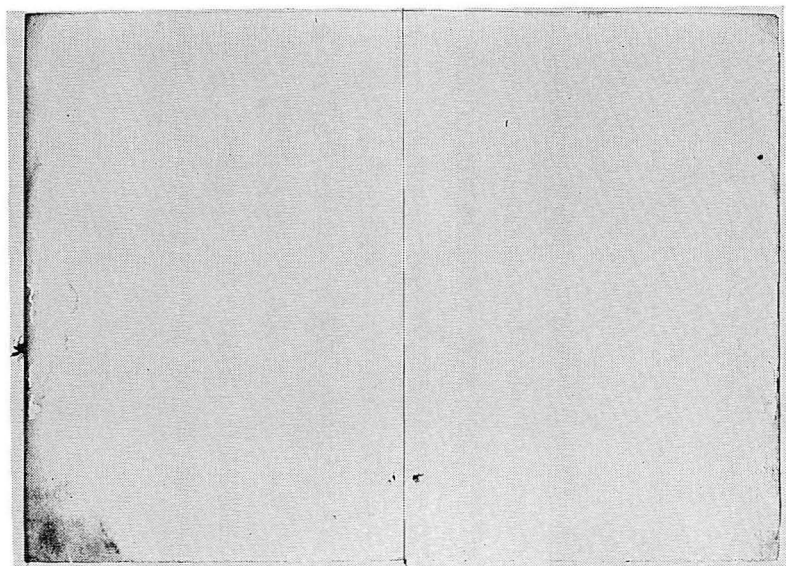
書き入れについても少し触れておこう。本文中、項目を示す合点、「いろは……」のそれぞれの始まりを示す丸印、最初の五丁分程には、人名・書名等を示す朱引きが、それぞれ朱で施されている。特に跋文の部分に関しては、異文・脱文等を朱で書き入れており、校訂を行った形跡が認められる。その際に用いた本文としては、跋文の末尾に「イ本ニ／山水のそのみなもとをきよめてそちゝのなかれも濁らさりける」と耕雲の跋歌を掲げていることより、耕雲の跋歌を奥に持つ本、しかもこの跋歌が、応永三年の仮名奥書の後ではなく跋文のすぐ後に記されていることや、文明の奥書が共に記されていないこと等から考えると、行悟僧正清書本とは系統の異なる耕雲本、その中でも中院家へ転出する以前の耕雲本の系統をひく本文である可能性が高いと言えそうである。

そしてこの『仙源抄』にはもう一種、墨筆による書き入れも数は少ないが存在している。まず跋文における墨筆の書き入れは、「イ」と表記されたものがなく、音読の表記を施したり、「本ノマ、」と記したりしていることより、書写者が書写する際か、書写した時期よりほどこい時点で書き入れたかと思われる。また本文部分においては、一ヶ所のみではあるが声点を記したり、その他漢字表記や注記事項が墨筆によって書き入れられている。

恐らくは、墨筆の書き入れが書き入れられた後、合点やその他跋文における脱文や異本表記が、朱筆によって書き入れられていったのであろう。

注

- 1 和田英松『皇室御撰之研究』（S 8・4 明治書院。）『仙源抄』の分類、系統に関しては、宮田和一郎「源氏物語の古鈔に就いての一考察」（『国語国文の研究』第二十六号 S 3・10）、山脇毅「仙源抄の二證本」（『源氏物語の^{文獻學的}研究』S 19・10 創元社 所収。）、重松信弘「後期の註釈的研究」（『^{源氏物語}研究叢書Ⅱ増補新攷源氏物語研究史』S 36・3 風間書房 所収。）等の論もあるので、詳細はそれらに譲りたい。猶ここの『仙源抄』の分類は、和田氏の論が多岐にわたるため、全て同書に拠った。因みに、近時武井和人氏によって耕雲『和漢字源通釈抄』との関連が指摘されている。同氏『和漢字源通釈抄』をめぐりて——耕雲における源氏学——（実践女子大学文芸資料研究所叢書Ⅰ『源氏物語古注釈の世界——写本から版本へ——』H 6・3 汲古書院 所収。）、「源氏物語注釈との関係」（『^{古今集}古注釈書集成 耕雲聞書』H 7・2 笠間書院 所収。）など参照。
- 2・3 上野洋三「堂上歌論の問題」（近世堂上和歌論集利行会編『近世堂上和歌論集』H 元・4 明治書院 所収。）



[illegible]

野三才味元
 名やうありん
 刺是
 香辛色本書二上書五元
 真抄秘授秘授秘授
 小書としてある
 小書としてある

智く理
智く事

幸ひ

[illegible]

子
維
 天
如
 天
美

ワド
なま
江戸時代書寫本
大正西院松林社
蔵書印

大正十一年三月
 伊豆山部
 伊豆山部

[illegible][illegible]

時年春令史志不
創

いづれも一病の神農本草ありき

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

人の心をとり、
その心は、
その心は、

何望すや後一葉にこそ落ぬ一葉ん
 幾多人の夢もろくをまき流してぞ
 前 共々なま

刻
て
月
日
山
城
と
云
ふ
事
の
あ
り
ま
う

[illegible]

1

類聚

[illegible]

どうも、この一巻と二巻の間に、
おまへにきく、おまへは、何れぞ。

三才

[illegible]

... (三十一) ...
... (三十二) ...
... (三十三) ...
... (三十四) ...
... (三十五) ...
... (三十六) ...
... (三十七) ...
... (三十八) ...
... (三十九) ...
... (四十) ...
... (四十一) ...
... (四十二) ...
... (四十三) ...
... (四十四) ...
... (四十五) ...
... (四十六) ...
... (四十七) ...
... (四十八) ...
... (四十九) ...
... (五十) ...
... (五十一) ...
... (五十二) ...
... (五十三) ...
... (五十四) ...
... (五十五) ...
... (五十六) ...
... (五十七) ...
... (五十八) ...
... (五十九) ...
... (六十) ...
... (六十一) ...
... (六十二) ...
... (六十三) ...
... (六十四) ...
... (六十五) ...
... (六十六) ...
... (六十七) ...
... (六十八) ...
... (六十九) ...
... (七十) ...
... (七十一) ...
... (七十二) ...
... (七十三) ...
... (七十四) ...
... (七十五) ...
... (七十六) ...
... (七十七) ...
... (七十八) ...
... (七十九) ...
... (八十) ...
... (八十一) ...
... (八十二) ...
... (八十三) ...
... (八十四) ...
... (八十五) ...
... (八十六) ...
... (八十七) ...
... (八十八) ...
... (八十九) ...
... (九十) ...
... (九十一) ...
... (九十二) ...
... (九十三) ...
... (九十四) ...
... (九十五) ...
... (九十六) ...
... (九十七) ...
... (九十八) ...
... (九十九) ...
... (一百) ...

Handwritten signature: *Wm. L. G. Smith*

とうねるまゝにんやと云ふは、塔とねるやな下巻とて
 是より書きたる様とおもふ者、あつた。此へ

定中興云、るる方紅雲
丁卯年
あめちきさ 丁酉年

引取の爲
鐵道を行き

Offen: kein Platz

をいふと

長々たるあつちを走つてつぎつぎと坂を登りて松林の

[illegible]

又
又
又

頼毫
帯也
瑞瑤石玉
老
也

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

[illegible][illegible][illegible]

結也又智解志も云々
 切り抜く
 印は雲山に在る

本意を
 示すに
 して
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

本
 山
 中
 大
 小

大正
 第 四
 第 一
 第 一

つゝも二匹居ても王を争ひあつてゐるが如く、女は王女
つゝも二匹居ても王を争ひあつてゐるが如く、女は王女

[illegible][illegible]

普通の如く分るべき
か
折檻
か
罵
責

[illegible]

1

[illegible]

割人 割 割

[illegible]

かへき 勝 あり 貴 新可 呂 呂 呂

[illegible]

光武皇帝、漢を興へ、又楊光、子孫を天下に傳へ、
 而して一騎を又起して漢を興へ、
 是れ又興

[illegible]

川下り舟より、三月廿八日、江戸、安永、是より一里、新倉、舟より、

其の二 其の三 其の四 其の五 其の六 其の七 其の八 其の九 其の十 其の十一 其の十二 其の十三 其の十四 其の十五 其の十六 其の十七 其の十八 其の十九 其の二十 其の二十一 其の二十二 其の二十三 其の二十四 其の二十五 其の二十六 其の二十七 其の二十八 其の二十九 其の三十 其の三十一 其の三十二 其の三十三 其の三十四 其の三十五 其の三十六 其の三十七 其の三十八 其の三十九 其の四十 其の四十一 其の四十二 其の四十三 其の四十四 其の四十五 其の四十六 其の四十七 其の四十八 其の四十九 其の五十 其の五十一 其の五十二 其の五十三 其の五十四 其の五十五 其の五十六 其の五十七 其の五十八 其の五十九 其の六十 其の六十一 其の六十二 其の六十三 其の六十四 其の六十五 其の六十六 其の六十七 其の六十八 其の六十九 其の七十 其の七十一 其の七十二 其の七十三 其の七十四 其の七十五 其の七十六 其の七十七 其の七十八 其の七十九 其の八十 其の八十一 其の八十二 其の八十三 其の八十四 其の八十五 其の八十六 其の八十七 其の八十八 其の八十九 其の九十 其の九十一 其の九十二 其の九十三 其の九十四 其の九十五 其の九十六 其の九十七 其の九十八 其の九十九 其の百

[illegible]

上座より虎の三葉根沈雄依之定印新ひり
あまは松山家老より

此下客分七子
 一茶毛ハ養老ニモ
 雪入あり
 今迄ハ

大正
 十一年
 三月
 十日
 午後
 五時
 分

此乃墨子之說也。墨子之說曰：『兼愛，天下之大利也。』

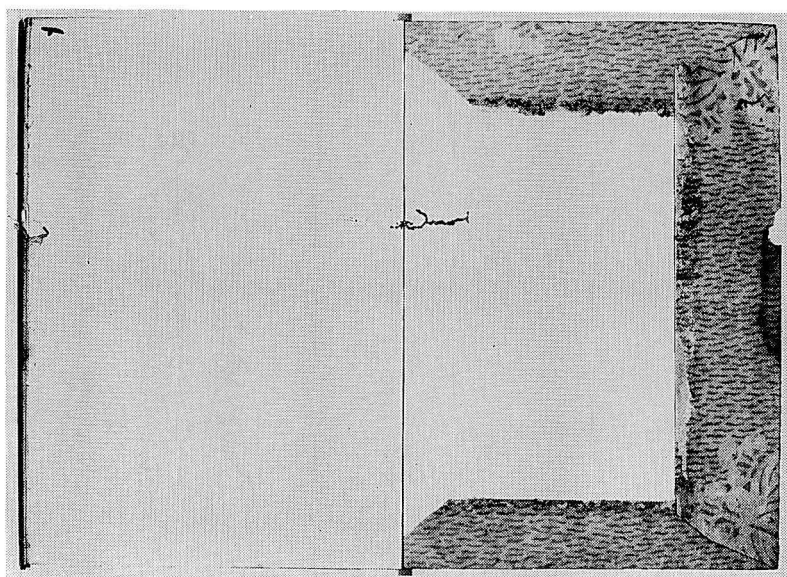
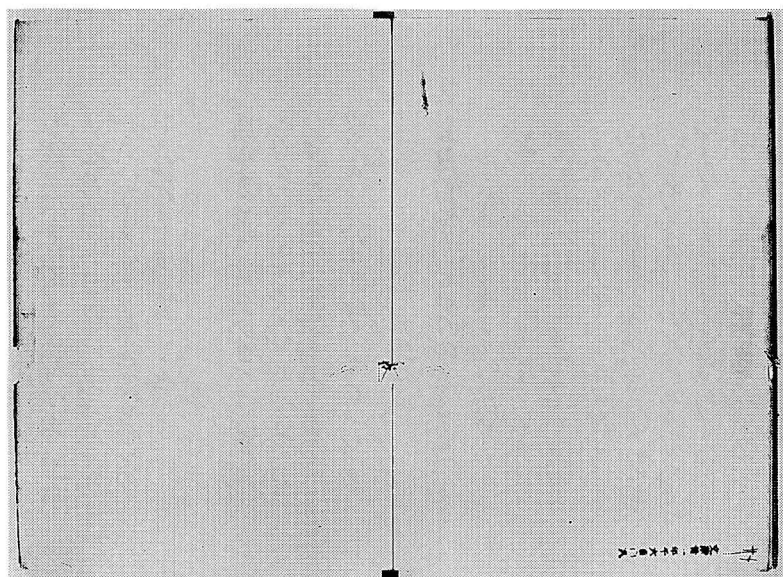
[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

(Handwritten Japanese text)

[illegible]



四十二 黒川文庫蔵『仙源抄』

